

先月、福島市内の中学校初任者が、野田中学校に来て1日研修をした。内容は、講義、グループ協議、授業参観などである。その中に、講話というものがある。私の出番である。時間はというと50分もいただいている。ありがたい。

いつものことだが、資料を準備した。話すだけの方、レジュメを用意する方など様々だが、私の場合は、読めば、ある程度はわかるレベルの資料を準備する機会が多い。聞く方はメモをとりながらだろうが、すべてをメモできるわけではない。後で見返したときに、その内容が蘇るようにしたいと考えている。記憶は、時間の経過とともに薄らいでいく。だが、記録はずっと残る。

自己紹介を交えながら「はじめに」にあたる話から始める方が多い。私はというと、自己紹介をしないで始める。万が一、時間が余れば、最後に自己紹介をする。大抵の場合は、時間が余ることなどないため、自己紹介をせずに会場を後にすることになる。そのため、いったいあの人は何者なのかという疑問が残る。

今回も、何の前置きもなく本題に入った。「職能発達上の変化は経験3年目までに生起する」これが初任者の方に、一番伝えたいことである。要は、教員になって3年目までが大事である。3年目までが勝負である。3年目までで、その後の教員人生が決まる。3年目までで伸びる角度が決まってしまう。

1年目、2年目あたりまでは、それほど大きな差はない。だが、5年後となると、明らかな差が出てくる。そして、10年目になると、その差は歴然である。違いではない。差である。1年目は初任者研修、2年目も2年次フォローアップ研修がある。福島県の場合は、3年目、4年目、5年目は、決められた研修がない。学校でやるか自分でやるかである。この3年間をいかに過ごすかで、その後が変わっていく。

初任者を前にしての講話では、自分の授業をビデオに撮影し、自分で見ることを勧めた。毎日やる必要はない。研究授業のときだけでもかまわない。例として、2人の先生のことを紹介した。

一人は、“もじもじ先生”である。以前、この先生は、授業中に、本人の表現によると、手わずらをしていたそうである。これは人に指摘されてやめたそうである。その後も、自分の授業をビデオに撮ってみたところ、自分の姿を見て吐きそうになったそうである。もじもじしているというのである。声も小さい。もう嫌になったそうである。

相談された私は、「役者になるしかないんじゃないか。演技だよ演技」と答えた。授業をするのはいいのだが、人に自分の授業を見られるのが過度に気になって仕方がないという。私は「仕事上のことは仕事で解決するしかない。授業のことが気になるのであれば、授業で解決するしかない」と励ました。

ビデオに撮った自分の授業を自分で見ることは辛い。「これが自分か」と思うほど愕然とする。恥ずかしくて正視できない。そういうものである。

(次号に続く)